

---

# 勇者と魔王は協定を結んだ。

異崎翔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勇者と魔王は協定を結んだ。

### 【Nコード】

N1931Y

### 【作者名】

異崎翔

### 【あらすじ】

純粹熱血単純馬鹿な勇者と、体力皆無だが知識は多い爆乳魔王が協定を結び、世界の变革目指して国を作ったり戦争したりそうでなかつたりな話。

## 第一部（前書き）

突発的に書いてしまった作品です。  
暇つぶし程度にでも読んでくださったら幸いです。

## 第一部

酷く美しい、妖艶な容姿を持つ、だがその顔は実年齢よりも幼く見える齡16の少女がいた。

漆黒の長い髪に、全てを見透かしているかのような青い瞳。頬は淡いピンク色をしている。そして形の良い唇。

出るところは出て、締まるところはしまっている、まさに女が求める肉体美の持ち主。

どちらかといえば華奢な方だが、年相応の男ならば目の行かないものはいないだろうと予想されるほど、彼女の大きな胸は強い印象をあたえた。

髪と同じく、漆黒のドレスに身を包んだ彼女は、水晶に映る男を見て微笑む。

彼女は魔王だ。

世界を畏怖<sup>いふ</sup>で支配する、唯一無二の存在。

彼女の視線の先、水晶の中には一人の平凡そうな男がいた。

平凡だが、右腰に柄の良い剣をおさめ、胸を張り歩くその姿は堂々たるもの。

表情はキッと引き締まり、前をこれでもかと言うほど見据え、大地を踏みしめ歩行する。

純粹で、正しいと思ったものは絶対貫く、いわゆる熱血。

人間の勝手な解釈を押し付けられ、それでも希望を託してくれた皆に報いようと必死に目的を遂行しようとする、魔王にとっては愚かな生物、勇者。

「もう少しで勇者が来る……」

自分を倒しにくる、つまりは自分の邪魔者でしかない勇者という存在。

だがこの魔王様は、勇者にとっても興味があった。

一刻も早く、勇者にあいたかったのだ。

「ううっ、寒っ」

一瞬、寒々しい視線を感じて、勇者は身震いした。

「誰かが俺の噂でもしてんのかな？」

いくら勇者といえど彼の実年齢は17。その軽い口調と外見を裏切

らぬものだった。

茶色い、すこし寝癖のついた短髪。170センチいくかどうかの、男性にしては少し小さめの身長。

右腰には代々勇者にのみ伝わっているという紋章のついた、美しい剣。

彼は驚くほどの良い姿勢で、淡々と歩を進めている。

「着いた……」

彼が見上げる視線の先には、魔王の城と呼ばれる、絶壁の崖の上に立つ高い塔。

周辺にはまがまがしいオーラが放たれている。彼は生唾を飲み下すと、魔王の城に足を踏み入れた。

中に入ると、いつの間にか立ちはだかっていた魔物に目がいく。

紫色の、血色の悪そうな肌の色に、細く、つりあがった瞳。

醜く歪むその口元から見える、とがった牙。

「ウツシエツシエ、人間だ人間！」

美味そうな生肉だぜ！ ヒヤッハーツ」

汚らしい、頭の悪そうな言葉と共に、我が身を投げってくる魔物。

それに微動だにせず、彼は。

「ヒエ？」

最後。

魔物は小さな声をもらし、上半身と下半身が真っ二つに切り裂かれ、緑色の血しぶきを噴出しつつ地に倒れ付した。

微動だにせず、ではない。

ただその動きが早すぎて、見えなかったのである。

彼は魔物が飛びついてきた瞬間、右腰の剣をすばやく抜き、見事としか言いようのない剣術で相手の肉体を真つ二つに斬った。

そして二度ほど剣を上下に振ると、剣についた気色の悪い緑の血を払い、また剣を鞘に戻したのだ。

どれだけ鍛錬しようと、才の無い者にはできない芸当であった。

彼は無残に散った、大きく目を見開きながら倒れている魔物の肉体を見ると、苦虫を噛み潰したかのような表情をして一言呟く。

「糞つ。魔物のクセに生意気な」

それは先程のような少年らしい口調ではなく、憎悪の対象であるかのごとく、低い声で呟かれた。

そして、視線を前に戻すと、また歩き始める。

緊張気味に、だがしっかりと。

それもそのはず。

この先には待ちに待った、魔王がいるのだから。

人間達を長く苦しめ、それを見下し高らかに笑っているであろう魔王が、突如現れたただの人間でしかない若造に倒される。

それほど滑稽なものには他に無いだろう。

勇者は緊張と、自分が振り返りに合うかもしれないという不安。

この手で、悪の元凶を滅ぼせるという嬉々とした感情。

魔王の姿を見れるという期待を抱えながら、前を見据える。きつと魔王のことだから、他の魔物たちと比べ数倍大きく、醜く、小汚い性格をした闇の塊のようなものなのだろうと推測する。

彼は小さく深呼吸して、己の感情を閉じ込めるかのように、また歩を進めた。

予想に反して、うじゃうじゃいると思われた魔物は少なかった。畏ではないかと、意識を集中させながら、目の前にある扉を見る。

ほかと比べて豪華な扉。

おそらくこの中に魔王がいるだろう。

またあふれ出しそうになる数々の感情を押し込めるかのごとく、彼は扉を開いた。

が。

「おう勇者よ！ やつときたのだな！？」

目の前に立ちふさがるは、己よりも少し年下くらいの、華奢な少女。彼女は漆黒の衣類に身を包みながら、嬉しそうに駆け寄ってくる。



「間違えました」

勇者は一言言うと、その豪華な扉を勢い良く閉じた。

爆乳美少女を幻覚で見ってしまうほど、俺は欲求不満だったのか……！？

確かに長らく女との縁は無かったとはいえ、これほどまでに欲の強い男ではなかったと自負していた。だが、現にあんな少女の幻覚を見ってしまうのは、顔と肉体の反比例するロリコンワールドへの欲全開ではないか。

彼はその一瞬の出来事に頭を悩ませながら、真の魔王のいるであろう部屋を探した。

## 第二部

勇者はその邪悪な欲を振り払うかのように頭を左右に振ると、強く頬を叩いた。

「……………」

もちろん、鍛え上げた自分の腕力に挟みうちで殴られ、痛くないわけがない。  
ジーンと赤くなる頬をさすりながら、少し涙目で魔王のいる部屋を探す。

だが、他のどこを探しても魔王らしきものはいなかった。  
いるのは皆雑魚ばかり。  
と、そこで。

彼に一つの疑問が浮かぶ。

あの美少女は、魔王に囚われた人間の可愛そうな少女ではないのか？

そもそもこの魔王の城と呼ばれる険悪な塔にあんな人間の女性がいるはずもない。

自分が現れたことで頬を赤く染め、嬉しそうに駆け寄ってきた少女。

「……………」

己の浅はかさに反吐が出る。

彼女は自分が来るのをずっと待ち望んでいたのだ。

魔王の手から開放され、一刻も早く親元に帰りたいたるうに。

自分はなんてことをしてしまったのだと、悔やみながら着た道を急ぎ足に引き返す。

寄ってくる魔物たちをことごとく無視し、やっとのことで戻ってきた豪華な扉の前。

ごくぐり、と生唾を飲み干し、扉を空けた。

そこにはやはり先程の、けしからぬ肉体を持った美少女がいる。

彼女はまたもや勇者を見つけると、嬉しそうに駆け寄ってきた。そして、

「やっと戻ってきてくれたのだな、勇者よ！」

初めて交わした言葉と似たり寄ったりの言葉を口にする。

やはり彼女は自分が来るのを待ち望んだ、魔王の被害者なのだ。元気そうなの姿にほっと一息ついていると、彼女は言った。

「よし、勇者よ。

私と手を組まぬか？」

「もちろん」

勇者は即答する。

自分は勇者だ。困っている人を見捨てておけるはずがない。必ず魔王の手から逃がして見せる、と心で決意した。

「本当か!？」

それは嬉しいな。てつきり勇者は魔王である私と手など組まぬと思  
つておった。

今回の勇者は頭の柔らかい者なのだな」

「そんなにほめられると……つて、え？」

魔王は若干小馬鹿にしたような言い草だったが、勇者はそれには気  
づかずに、意識を彼女の違う言葉へと向けた。  
彼女は今、「魔王である私」と言っただろうか？

最近女との縁がなさすぎたのかもしれない。幻聴が聞こえる。  
彼女は囚われの姫。勇者が助け出すべき大切な存在であるはずだ。  
そのはずなのだが……。

「今、なんて？」

「頭の柔らかい者なのだな」

「その前」

「今回の勇者は」

「もつと前！」

「魔王である私」

「それだ！

『魔王にとらわれた私』ではないのか？」

彼女はそんな当たり前なことを聞くな、とでもいったそんな表情で  
勇者を見つめた。

「ああ、正真正銘、私が現在の魔王だ」

それに、勇者は多大な悲鳴をあげることとなる。

「はあああああ!?!  
あんたが魔王だと!? 魔王が女だなんて聞いてないぞっ!  
さてはお前、魔王の影武者として操られているんだな?」

ならばすぐにでも開放しなければ。

そう決心する純粋な少年は、右腰に携えている険を少し触る。

それに対して目の前の爆乳美少女は、

「お前は馬鹿か?」

とどめの一言を刺した。

やっと勇者が現れ、己の目的のために手を組むことができると、嬉々としていたのにも関わらず、目の前の魔王に対して現実逃避を働くような男が勇者では、少し頼りない。いや、とても頼りない。

彼女ははあ、と息を吐くと、真直ぐに勇者を見つめた。

それに勇者も真直ぐに彼女を見つめる。

そこには、とても緊張の含まれた雰囲気があったよっていた。

魔王が目の前の勇者に殺気を放ち、それに瞬時に反応した勇者が鍛錬の賜物とでも言えはいいのだろうか、常人になればその残像を捉えることも難しいほどの速さで、軽く触れていた剣を抜いた。

それを遅れて確認した魔王は、一人で納得したように頷き、少し微笑んだ。

「ほう。この殺気に反応するか」

「……?」

魔王が少し不気味に微笑むと、それに勇者は過剰反応する。相手は少女とはいえ、魔王。

この世界に住む人間達を苦しめ、高らかにあざ笑っているような魔物の頂点に君臨する者だ。

勇者は決意を固くすると、剣を構える。

「女を手にかけるのは本意ではないが。

魔王となれば話は別だ。お前にはここで死んでもらうぞっ」

それに魔王は、

「あ、ちょっと待て」

駆け出そうとしていた勇者を制止した。

それを聞かずにその首を飛ばしていればあっさりと魔王を討伐できたものを、この勇者は純粹ゆえに、動きを止めてしまう。

「なんだ？」

用が済めばお前を斬る。勇者の目はそう語っていた。

だが魔王は落ち着き払った表情で一言言った。

「私はぶっちゃけ強くない」

「は？」

「確かに殺気を放つたり医療系統の魔術を使ったりするのは得意だが、伝説の魔王等のように『一瞬で国を炎の海に！』とか、そういうことは不可能だ。

あと、体力もない。自慢ではないが物心ついたときからこの塔にいるのだ。走ることはおろか、長距離を歩いたこともない。この細腕を見ればわかるであろう」「

そういつて自分の細腕を見せる魔王。と、同時にその胸が揺れ、思春期男子の欲望を強くさせる。

どうにか抑え、確かに自慢にはならないなど、紛らわせるかのよう  
に勇者は同意した。

## 第二部（後書き）

お気に入り登録してくださった方、感想を下さった鍵猫さん、ありがとうございます。

まだ名前が出ていませんが、二話後あたりに出る予定なので、今しばらくお待ち下さい。



## 第三部

「……で。」

自分は強くないからと、俺との戦いを放棄するのか？」

魔王のクセに。

最後心に思った言葉は言わないことにした。

いや、魔王だからだろうか。

魔王だから、小汚い手段を何策も用意しているのかもしれない。油断したうちにグサリ、なんてことがあってもおかしくない。

高まる緊張を押し隠すように、勇者は魔王を見つめた。

が、対する返答は拍子抜けするものであった。

「いや、実際お前と戦うつもりは毛頭無かった。

最初に言ったであろう。よく来てくれた、私と手を組まないか、と。私は目的のためにお前の力をかりたいのだ。

そのためならば、私は己の身をお前に売るつもりだ。

目的が済み次第、煮るなり焼くなり強姦するなり、好きにすればいい」

最後のはいらないのではないか、と一瞬思ったが、彼女の瞳から目が離せなくなり、思考を止める。

魔王の意志は固い

そう思わざるをえなかった。

彼女の瞳の奥に感じる強い意志。  
いくら勇者が鈍い存在だとしても、それくらいの事とはわかった。  
だが、

「俺は勇者だ。人間達を救うために、お前を倒さなければいけない」

「そのためならば、私や、魔物たちを殺してもいいと？」

殺す 嫌な言い方をするな、と思いながらも彼は答える。

「必要とあらば」

「魔物も、生きているのだぞ？」

皆が皆、人間の集落を襲っているようなものばかりではない」

「……………しかし、そうしなければ人間はずっと不幸なままだ」

勇者が旅に出る前、勇者となると決意したときに教わった魔物たちの悪事の数々。

自分が勇者でなくとも、どうしても見過ごせないものがあつた。

それに反して魔王は可愛らしい顔をしていながらも、つまらなそうに吐き捨てた。

「ふん。」

人間も小ざかしいまねをする」

肉体と顔が一致しないような外見。

そんな容姿で、彼女は大人びた、少し逆らいがたい何かを感じさせる口調で呟く。

それに勇者の火がついた。

「なんだと……？」

「天賦の才がある純粹な……いや、単純馬鹿を勇者に選び、魔王を消し去ろうという魂胆か。

己の手を汚さずに」

「なに……俺は単純馬鹿ではない！」

「そこに突っかかってくるのも単純馬鹿の証拠だ。

そもそも、自分が勇者に選ばれるという時点でおかしいとは思わないのか？」

「う……」

魔王の一言に何も言い返せなくなり、ついた火が消されたような気がした。

最初は、なぜ俺が？とも思った。

だが、だんだん話を聞いていくうちに勇者は自分にしかできない大役だと思い、引き受けたのだ。

心中察するかのように魔王が口を開く。

「上手く丸め込まれたか。

そういえば、お前は我等を殺しつくさない限り人間は不幸になる、といったな？」

「そうは言っていない」

すかさず反論する勇者に、彼女は間髪入れず続けた。

「似たようなものだ。

ならば問うが、魔物が人間の集落を襲い、人々を殺したらお前はど  
うする？」

「倒しに行く」

「では、何もしていない魔物を、人間の勝手な都合で大量虐殺され  
たら？」

「……………」

答えられない勇者に、魔王は口角を上げた。

上手い具合に乗せられているとは気づかずに、勇者は下唇を噛む。

「おや。勇者とは正義のヒーローではないのか？」

それとも、お前は種別に差別をするのか？」

「違う！ 俺はそんなことはしない！」

「そうか、なら」

彼女は不適に笑む。

そして、全てが計算通り、とでも言うかのような表情で、言った。

「人間も魔物も幸せにするために、私と手を組まないか？」

それに押された勇者は、答える。

「……………とりあえず、話を聞こう」

それに魔王は、その顔に似つかない、酷く妖艶な笑みを浮かべた。

### 第三部（後書き）

次回、魔王と勇者の名前がやっと！

お気に入り登録ありがとうございます。

紅月 空様、v a z様、感想ありがとうございます！

## 第四部

勇者を、とりあえず「話し合い」という状態に落とした魔王は、言った。

「では、とりあえず自己紹介からといこうか。いつまでも勇者、魔王と呼び続けていては疲れる」

その大人びた口調に、勇者は答え、言われたとおりに自己紹介を始める。

「ああ。

俺は八神<sup>やがみ</sup>・ライトリークだ」

「私はクリフォンス・フレイア。『フレイア様今日もお綺麗ですね』と言いながら靴を舐めれば特別に、踏んでやらんこともないが」

死んでもやらねえよ！ と、ツッコミたい衝動をなんとか勇者はいや、ライトリークは抑える。

それを察したのか、少し頬を赤らめながらフレイアは一言言った。

「冗談だ」

そして、ライトリークの名に興味を示したのか、問う。

「八神？」

「あ。 ああ」

その一言に、目の前の少女が何を問いたいのかが一瞬にしてわかった。

それはライトリークの性格などとは関係なく、今までの生活から悟ったものだった。

「俺は一応、国の十貴族の中の一人、八神家の当主の一人息子だ。次期後継者とも言うべきか」

十貴族とは。

ライトリークの住まう国、レイフオント大国の貴族の中でも多大な権力を握る、十の貴族たちのこと。

十貴族の姓には一から十の数字が必ず入っており、彼らは血縁を最重視している。

血縁を重要視しているとはいえ、十貴族は名ばかりではない。それぞれ実力を持ち、国の明日の方向へと導くために惜しみなく財力や権力を提供している、実力派の貴族たちだ。

例になるのが、ここにいる八神・ライトリークという少年。

彼の家は国立から長らく代々国王を支えてきた、剣術を主とする由緒正しき家柄である。



初代は国立に全力を注ぎ、助け、八代目は国の戦乱の危機をその華麗なる剣術で救ったという。  
他にも数々の実績を挙げてきている。

結果、今では剣術で八神家の右に出るものはいないとまで言われ、王の信頼も厚いものだ。

現在、当主は21代目、ライトリークの父にあたる。  
いずれは父も老い、22代目をライトリークが継ぐことになるだろう。

「ほう………」

フレリアから、感嘆の息が漏れた。  
それもそのはず。

魔王の塔と呼ばれるこの塔に住まう魔物を、立ち向かった魔物等は低俗とはいえ、一瞬にして倒した男。

どこで剣術を訓練したかと思いきや、代々伝わる八神家の後継者だったとは。

おそらく幼少期より辛い訓練を受けてきたのだろう。

それは、このか弱き少女にも手に取るようにしてわかった。

だが。

「己の素性を簡単に相手に明かすのはどうかと思うが」

「う……」

ライトリークは彼女の一言に一瞬ひるむ。

が、このまま負けては先程の二の舞だと、反論に出た。

「先に自己紹介をすと言い出したのはお前だろっ！」

「別に強制はしていない」

「……………」

しかしすぐさま撃沈。

どうにかして目の前の頭の回転の速い少女を負かせないかと考えるが、彼にはいい策が何一つ思いつかなかった。話し合いという方向においては。

「次期後継者がこれでは、先が思いやられるな」

「……………」

上手くいけば今後の相方となるであろう男には辛い一言をぶつける。

そうなのだ。

あまり頭回転が良くない故、簡単に勇者になれと丸め込まれ、魔王の城に一人でくるなんて馬鹿なことをしてしまったのだ。

父はきつと、そんな息子をふがいなく思っているに違いない。

これでは後継も危ういかもしれない。

それは、昔から思っていたことでもある。

一時期は勉学に励んだこともあったが、どうも彼には合わないらしい。

一般的な貴族の知識以上のことを吸収するには無理があった。

そのせいか、彼は父との訓練時くんれんとき以外でもいつも剣を振り続け、己を剣術一筋で磨いてきた。

彼の今の実力は確かに天賦てんぷの才と、血の滲むような努力あつての賜たま物である。

頭の悪さは彼のコンプレックスの一つであったが、逆に目の前の少女には嬉しくもあつた。

頭がよければそれはそれで良いと思つてはいたものの、剣術の力がその分劣つていては話にもならない。

頭は自分が補えばいい。

彼女の欲ほつするものは、確かな腕の実力であつた。

その実力があると見受けたから、彼女はこうして勇者に話し合いを用い、手を組もうとしている。

己の目的のために。

「では、本題に入ろう。ライトリーク」

少し嬉しそうに言う少女に、ライトリークが一瞬とは言え、目を奪われたのは不覚だつた。



## 第五部（前書き）

作者に専門知識はありませんのでご了承ください。

## 第五部

そして彼女は妖艶な笑みを浮かべながら、近くにあったイスに座る。

今まで彼は魔王のことしか見ていなかったが、少し余裕ができるとあたりを見回した。

踏み心地からしてもかなり高級品だとわかる、トマトジュースのよ  
うな深紅のカーペットが広い正方形の部屋全体に敷かれている。  
ずっと眺めていると酔いそうなくらい、目に痛々しく映る。

丁度部屋の真ん中に直径150センチくらいの丸いテーブル。その  
近くにイスが二つ。一つはすでにフレイアが足を組みながら座って  
いる。

フレイアの奥には、黒いベッド。

浅黒いカーテンのようなものが上から釣り下がり、その中で大きな  
ベッドの上に、端にフリルのついた黒い布団がかけられている。

お姫さまベッド、と似たような形状だ。

窓も大きく、その向こうは少しの陸地を過ぎると、深緑の巨大な海  
が広がっていた。

今更ながら、ほんのりと塩味のする風が流れていることに気づく。

なぜ？ と、少し首をかしげていると、フレイアが周りをキョロキ

ヨロと見だしたかと思うと首を傾げだした、挙動不審なライトリークという男に言った。

「お前は変態か。」

乙女の部屋をじろじろと見回すな」

言葉は冷たいが、その顔は少し赤く染まっていた。

「え、ここお前の部屋なのか!？」

……趣味悪……」

「ここで死にたいか？」

「やれるもんなら」

そう言って、ライトリークは剣に手をかける。

実践なら自分に分がある。

彼女は戦闘において、あまり強くない。いや、弱いといっても過言ではないかもしれない。

先ほど自分で言っていたように、彼女からは『戦闘ができます』という雰囲気は全くないのだ。

自分が勝てる、そう確信しているからこそ強気にでれるのだが。

「お前に殺される前に、私がお前を殺せばいい。

忘れたか？ この塔にはもっと強い魔物がうじゃうじゃといる。

それに私が医療系統の魔術が得意だとも言ったであろう。

大腿動脈から適当にホルマリンに近い物質を注入すれば、お前は生

きていられないぞ」

当然のように言うフレリアに、ライトリークは首をかしげた。

「……………えっと、悪い。途中から話がわからなくなった」

「これだからお前の頭は弱いんだ」

「なんだと？」

ため息交じりに言うフレリアをライトリークはきつく見据える。

「お前それでも貴族だろう。」

少しは勉強に励んだらどうだ」

「励んださ！ 一時期は……………」

語尾がだんだんと弱まり、彼女は二度ふたたびため息をついた。

そして一から説明してやる、といわんばかり上からの口調で、

「どこがわからない？」

と聞くものだから、彼は答えた。

「大腿動脈から」

「大腿動脈は、ももの内側を通っている、鉛筆ほどの太さの動脈だ。  
…あとは？」





間髪いれずに答える魔王という生物に、ライトリークはさらに声を荒げる。

「うるさい！」

俺だって一般常識くらいはきちんと学んだ！」

「ならば問うが。一般常識ができるなら、お前にも解けるはずだ。問題、『店で1000リツチの物入れを10個買ったなら三割引におまけしてくれた。支払い金額はいくら?』」

「……………ちよつと待て」

彼は抱えた頭をさらに強く抱え、その低レベルな問題に挑む。

( 一個1000リツチのものを10個買ったから、全部足すと1000、2000、……………10000だろ?)

そこから三引き…………… )

「できた！」

不意に立ち上がった少年の顔は、満足そうに笑んでいる。できたことが、相当嬉しかったのだらう。

「答えは、623リツチだ!!」

その答えが正当なものかどうかは置いておくとして。

「ド阿呆。なぜそんな複雑な答えになる。700だ」

「……………っ!？」

「そんな、馬鹿な、みたいな表情でこちらを見つめても答えは変わらない。」

これでわかっただろう。お前は本物の馬鹿だ」

勝ち誇ったように言うフレイアに、ライトリークはもう一度頭を抱えた。

そこには、陰から眺めている一人の女がいることを知らずに。

## 第六部

フレイアはライトリークを馬鹿馬鹿と罵ると、少し満足げに頷く。

「うん、それでこそ勇者だ」

「意味がわからん」

反して彼は、不服そうにフレイアを見つめる。

そして彼の中に疑問が浮かんだ。

こんな魔王がいて、大丈夫なのか？

もちろん他者からすれば、こんなのが勇者で大丈夫なのか、という疑問が浮かぶわけだが、あいにく彼にはそれを知る由も無い。それを幸運ととるかどうかは決めがたいことだ。

ライトリークは妖艶な笑みを浮かべる一人の華奢な少女を改めて見据える。

「で、お前の目的はなんなんだ？」

「ん？」

彼の発した言葉に、彼女は何のことだ？ とでも言いたそうな表情をする。

「目的に俺の力が必要だから、俺と話し合いなんて言い出したんだろっ」

「あ……ああ、そうだった。話から脱線していて、すっかり忘れていたよ」

そういって、小さく笑むフレイア。  
ライトリークはそんな彼女を見据え、切り出すのを待っていた。

ここで彼が言葉を発し、話をややこしい方向へと導いてしまったのは、また罵られることが目に見えているからであろう。

それを知ってか知らずか、彼女は再び小さく笑むと、すぐに真剣そうな顔つきになった。

「率直に言おう」

少しの間をおいて、彼女は言葉を続ようとする。

その少しの間が、ライトリークには何十秒という長い時間にも感じた。

ゴクリと生唾を飲み込む。

そして、彼女の口が開く。

「私と手を組んで、世界を滅ぼして欲しい」

「……………はぁっ!?!」

ライトリークは奇妙な声をあげた。あまりにも予想外すぎる言葉だった。  
もちろん彼に、フレイアの目的を予想付けるヒントはほとんど無かったに等しいが、それにしてもぶったまげた話だった。

「世界を、滅亡……？」

「ああ」

「……それがお前の企みなら、俺はお前を倒さなければならない」

彼は勇者。

人の生を守るために仲間を経て旅をし　最終的には一人であったが　魔王の城へと足を運んだ勇敢なる若者。

人の生を守るために活動してきた彼が、世界を滅ぼすなどできるわけが無い。

むしろ世界を滅ぼそうとするものがいれば、その元凶を壊してこそ勇者。

戦う意思はないと言いながら、自分の前で世界を滅ぼすなどと言い放った魔王に、怒りがこみ上げる。

奴は俺を騙したんだ、と。

彼は真直ぐに彼女をにらみながら、腰に携えている剣に手をかけた。

一方、勇者を怒気させた魔王は、予想通りとでも言いたそうな、涼しげな表情で今にも剣を抜きそうな彼を制止する。

「まあ待て。」

話を最後まで聞かんか」

「なんだ。言い訳なら聞かないぞ！」

「言い訳ではない。言い分を聞けとっているのだ」

どちらも似たようなものなのだが。

「……そうか、それなら聞いてやろう」

あっさりライトリークは頷いた。

彼が頷くのを分かって言ったのか否かは、定かではない。

しかしフレリアは満足げに微笑むと、先ほど言おうとしていたであろう言葉を続けた。

「私はな、何もこの世界の生物ごと全てを滅ぼそうと考えているわけではないんだ」

「?」

意味が分からない、という表情をするライトリーク。

その顔からは、『世界滅ぼすというのは生物も何もかも全てを殺すことではないのか?』という疑問が手に取るように分かった。

「そうだな、言い方を変えよう。世界を再生　いや、変革というべきか。」

一度この腐った世界に終止符をつけて、新たに世界を作る」

「……变革……」

「ああ。

今のこの世界を眺めてみる。腐りに腐りきっているであろう？

権力者達は私利私欲に財産や兵等を使い生き延びる。それに反して平民達は権力者の気まぐれに振り回され、理由は多々あれど生命を<sup>いのち</sup>落とす。

犠牲の上に成り立つ、哀れな雑草たちの生き延びる世界だ。

魔物達も、決して平和ではない。小さな幸せすらも、小汚い低俗に潰されているのだ」

その言葉には、自然と重みがあった。

幾つものそれらを見てきたような、悲しそうな瞳をする少女。

齢十六の少女が言う言葉にしては、現実味があり、それと同時に彼にも同意せざる得ない内容も含まれていた。

ライトリークが魔王の城に来るまでの間、幾重もの町や村、国を見てきたが、幸せそうに暮らしている裕福な土地はわずか一握りではない。

領主や国王よってその集落の裕福さが決まるほどだ。

権力者達が贅沢をするほど、それに嘆く民がいる。

『犠牲の上に成り立つ哀れな雑草』

それは驚くほどに、今の権力者達の大勢と重なっていた。





## 第六部（後書き）

だんだん方向性が変わってきてしまったので、タイトルを変えようかと思っています。

変えた後も、どうぞよろしくお願いいたします。

## 第七部

少しの沈黙が彼らの間に流れる。

やがて口を開いたのはライトリークであった。

「じゃあ……。その変革をするために、お前は何をするつもりだ？」

「世界を滅ぼすといっただらう？」

「それは聞いた。俺が知りたいのは具体的に何を成すか、と言うことだ」

「……………」

フレイアは少し考え込むようなしぐさをすると、組んでいた足を一度直し、今度は逆に組みなおした。

ライトリークは黙って彼女の発する言葉を待つ。

「先程、私は世界に終止符を打つといった。そのためには、私は人間世界の絶対的な勢力と、魔界の最大勢力をうち滅ぼさなければならぬと考えている。」

だが、今の私達では最大勢力を倒すには圧倒的な力の差がある。たとえば私が知に優れ、お前が天賦の才に恵まれていようとものだ」

今、ちゃっかり自慢をしなかつただろうか？

そんな疑問が頭を駆け巡ったが、あえてライトリークは無視することにする。

「故に、まずは私達と共通の願いを持つ仲間を集めようと思う。最初はお前の仲間も一緒にこの作戦を決行するつもりだったのだが…」。

どうやらお前は仲間に捨てられたらしい」

ふふっ、と鼻で笑う魔王。

「捨てられたんじゃない！！ 俺の仲間達には……俺よりも優先すべきことがあつたんだ！」

「ほう？ じゃあ魔王討伐よりも優先すべきことは頭の悪い勇者を捨て、カジノで遊ぶことか？」

含み笑いをしながらテーブルの上においてあつた水晶を見せてくるフレリア。

それを覗き込むように見ると、金髪の見覚えのある優男のような下種が、女に囲まれながら金を賭け、ゲームをしている光景が入ってきた。

「く……っ、フェラルめ……」

そう、彼の名はフェラル。王都を出るとき共に旅を始めた仲間の人だ。

弓矢の達人で、王都の中でも一、二位を争うほどの腕前。

別れ際の言葉は『僕は少しここで休憩していくよ。後で追いかけるから、先に行っててくれたまえ』

「あんの女つタラシが……！」

「どうせ見捨てられたのだろう。こんなむさ苦しい集団と見ていてイライラするほどの勇者には付き合ってもらえない、とかなんとかで」

「ぐっ……そんなはずは無い！……はずだ」

「なんだ。確信も無いのか。安い友情だ。……だが、お前と同じくらい、気配には敏感そうだ」

そう呟いた瞬間、少し冷たい視線でフェラルが水晶を通してこちらを向いた。だがそれもほんの一瞬で、本当に自分を映し出す何かに気づいたのか、それともたまたまだったのかは分からない。

そもそもこの水晶の仕組みすら分かってはいないのに、ライトリークにそれが分かるはずもなかったのだ。

彼は一つ首をかしげると、もう一度水晶にうつる外見優男を見た。

整った金髪碧眼。一緒に旅をしていたときもそうだったが、彼の女からの人気度はこちらが羨むどころか、あきれるほどだった。

彼は自分をフェミニストだのと評していて、女性には基本的優しい。そのせいか、戦いになっても相手が性別上牝となると、手は出さない。少し困った性格の仲間だった。

「やて、と……」

ライトリークが食い入るように水晶を見てみると、フレリアが一言

眩きながら立ち上がった。  
そして視線はすらさずに、話していたときよりも少し大きめな声をあげた。

「メリア、いるのだろうか？　そろそろ盗み聞きなんてやめて出てきてはどうだ？」

「……………」

フレシアがいうと、ライトリークがクローゼットの方を見た。

ライトリークは、どうやらメリアとよばれた人物の存在に気づいていたらしい。あえて言わなかったのか、それとも面倒くさかったのか。

ガタツ、と音を立ててクローゼットが開く。  
中から出てきたのは…………。

「あら、気づいていらっしやいましたか？」

女性にしてはわりと高めな身長、メイド服を着た人。黒髪を上の方で団子型にまとめていて、笑顔でこちらを見ていた。

「お前はいつも神出鬼没だからな。16年も一緒にいれば嫌でも分かる」

「そつでございませうか」

なんてこと無い会話のようにして受け流される。  
だが、ライトリークには一つ解せないことがあった。

（なぜ…………クローゼットから出てきたんだ…………？　それも、フレシアの服をかぶって！）

そう。クローゼットはそれなりに広いから、隠れていたといえは頷ける。  
だが、出てきたときの彼女は、自分の首もとを黒い服、おそらくフレイアの上着だとおもわれるもので覆っていたのだ。それもおもむろに臭いをかいでいる。

「フレイア様。私のことはおきになさらず、続けてください」  
「ああ……もとよりそのつもりだ」

普通に、それが当たり前だったかのように話しを進めようとするフレイア。

「……………!!」

ライトリークは目の前の変態のような女性を横目に、なぜツッコミをしないのかと全力で叫びそうになった。

「なんだ？ なにか言いたそうだな？」

「言いたいことはたくさんあるんだが！」

「そうか？ 言ってみる」

「……………っ」

それができないから困っているんじゃないか      ライトリークは  
なんとか言葉を飲み込む。

(このメイドは変態か？      なんて聞けるわけない!)

変人を見るような目でライトリークがメリアを見つめていると、彼女はその視線に気づいたのか、ニッコリと微笑みかけてきた。



## 第七部（後書き）

拍手機能をつけてみました。

もしよろしければポチッと押したついでにメッセージも下さると幸いです。

（更新早くしろ等のブーイング可）

今後も変態が増える予定です（笑

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1931y/>

---

勇者と魔王は協定を結んだ。

2011年12月11日18時53分発行